

子どもの活動から捉える園庭環境の探究 ：保育に関与する者の役職に着目して

EXPLORING THE PLAYGROUND ENVIRONMENTS BY EXAMINING THE ACTIVITIES OF CHILDREN ：A FOCUS ON THE POSITION OF DIRECTORS, PRACTITIONERS AND OFFICE WORKERS

宮本 雄太*¹、秋田 喜代美*²、辻谷 真知子*³、宮田 まり子*⁴、石田佳織*⁵

Yuta MIYAMOTO *¹, Kiyomi AKITA *², Machiko TSUJITANI *³, Mariko MIYATA *⁴, Kaori ISHIDA *⁵

In recent years, the importance of outdoor play continued to be emphasized (Senda, 1992; Bhosale, Duchan & Schofield, 2017). It is said that the difference between the process quality such as the children's activities during play and the structural quality such as the environments when arranged by adults are remarkable (Lester and Maudsley, 2005). However, there are few research that have focused on those involved in ECEC by their position (such as directors, practitioners and office workers) and their differences in recognition of the functions of playground environments. Therefore, the purpose of this research is to examine whether each positions consider their functions of children's activities that occur on the playground environments. This study used a quantitative methodology, which was based on a questionnaire to gather data from ECEC centers. A total of 1,740 centers (49.8%) replied. Firstly, regarding the number of responses by ECEC position, results revealed that there was a difference in the number of responses for each position, but that the number of responses was about the same ratio. Secondly, the functions and trends of concrete playground environments recognized by each position were shown, regarding the top five of responses by each position.

Keyword : *The Position in ECEC, Perspectives of Children, Playground Environments, Difference of Perspectives, Questionnaire*

保育に関与する者の役職、子どもの視点、園庭環境、視点のズレ、質問紙

1. 問題と目的

乳幼児期の教育・保育は、多様な環境を通してなされる営みであり¹⁾、屋外環境に配慮することは重要である。しかし近年、屋外で遊ぶ機会は国内外を問わず減少しているため、屋外環境や屋外遊びの重要性が問い直されている^{2) 3)}。乳幼児にとって、屋外環境は四季に応じた様々な自然物・事象との出会いや探索を可能にする場であると共に、体を動かしながら仲間と共に遊ぶことができる場であると言える⁴⁾。乳幼児期の屋外環境である園庭環境に関して、幼稚園施設整備指針⁵⁾では「自発的、自主的な活動を展開できる」ように、「興味や関心、遊びの変化等に応じ遊具の再配置が可能となる」場のあり方に配慮するような、子どもの求めや

育ちに応じた環境づくりの重要性が示されている。上述のような保育の環境デザインのあり方については国際的にも注目されており、特に屋内外の環境で動と静の場を設えることの重要性が指摘されている^{6) 7)}。

OECD⁸⁾は、子どもの発達と学びを保障する保育の質に関して、子どもが生活する施設の広さや人数比などの人的・物的構造を問う「構造の質」と子どもが日々経験していることを問う「プロセスの質」が重要であり^{注1)}、それらが子どもの成長を中心にして双方向に関係し合うことが重要であることを示している。

子どもの遊び環境の特徴について、物理的環境の視点から構造とプロセスの両側面を捉えた仙田²⁾は、遊び空

*1 東京大学大学院 博士課程・日本学術振興会 特別研究員 (DC)
*2 東京大学大学院 教授・博士 (教育学)
*3 白梅学園大学 / 日本学術振興会 特別研究員 (PD)・博士 (教育学)
*4 白梅学園大学講師・博士 (教育学)
*5 園庭研究所・代表

*1 Graduate School of Education, The University of Tokyo, Doctor Course, Graduate Student / JSPS Fellow
*2 Graduate School of Education, The University of Tokyo, Professor, Ph. D
*3 Shiraume Gakuen University / JSPS Fellow, Ph. D
*4 Shiraume Gakuen University, Lecturer, Ph. D
*5 Preschool Outdoor Environment Design Office, Director

間に「近道ができる場」「循環機能がある場」「めまいを感じる場」「シンボルのある場」「多孔質な場」といった遊環構造を設えることが、子どもの活動を活発にして遊びを生み出すことを示した。園の屋外環境に関する場の意味づけとその解釈を豊かにして、屋外環境における子どもの経験を保障することの大切さは、保育実践の場でも認識されてきている⁹⁾。例えば、河邊¹⁰⁾は子どもの遊び環境の特徴について、実践の視点から構造とプロセスの質の両側面に着目しており、子どもの日々の遊びから園庭構造を見直し園庭改革を行う過程を検討している。そこでは、園庭という構造の再構成には保育者が子どもの遊びの現状を理解し、環境設定に反映させることの重要性が指摘されており、構造を捉える際に子どもの経験を問い直すことが必要であると指摘している。

特に、園庭環境はクラスや年齢を超えて、多様な子どもが遊ぶ場であるから、環境設定の際は多様な役職間のすり合わせが必要である。しかし、園庭は屋外環境が持つ構造的特徴やそこでなされる子どもの経験など、多様な要因とそれぞれが持つ価値に配慮して遊び空間を設えることが困難な場であると共に、子どもの空間を保障するために、複数の視点で場を捉え直すことが見過ごされがちな場であることが指摘されている¹¹⁾。考えられる要因の一つとして、例えば、屋外環境は屋内環境よりも管理や予測が困難で、ガイドラインで明確に定義づけにくいことが指摘されており¹²⁾、国内外での課題となっている。また日本では、現状では物理的環境や資源に制約があること、改造・改築等の予算にも制限があることが指摘される^{13) 14)}。さらに、園庭に関して、保育者が環境構成の知識や技術を獲得することは難しいことが指摘される⁷⁾。これらの問題点は、園の屋外環境である園庭の構造上の限界を踏まえつつ、子どもの経験から場の意味を読み取り、場を設えることで園庭環境により豊かな経験を保障していくといった可能性があることを指摘している。

一方で、子どもが好む場の使い方と大人が子どものために用意する場への教育的意図との間には明確な不一致が存在すると言われる¹⁵⁾。ここでは、子どもの願いや思いと保育者のその汲み取りや配慮には齟齬が生じるからこそ、構造とプロセスの双方向な関係の中で場を捉えることの難しさが指摘されている。例えば、宮本他¹⁶⁾は保育者と幼児それぞれに写真投影法とインタビューを行い、保育者が捉える幼児の好きな遊び場と幼児自身が好きだとした遊び場のそれぞれの理由に着目した。結果、幼児の好きな場の理由は、その場で生起する思考や感情といった心情面に起因する「状態要因」を回答する傾向がある一方で、保育者の幼児が好きだと捉える場の理由は、「状態要因」と場それ自体の性質に起因する「空間要因」の両方を回答する傾向があることを示した。これは、保育者が職責として子どもの空間を保障する視点と子どもの心情を汲み取る視点の両面を捉える専門性を持つ存在であることが示される一方で、この専門性が子どもの好きな場の捉えのズレにもなり得ることを指摘している。つまり、構造とプロセスの双方向な関係の中で場を捉える際には、

保育者は子どもの経験に関する解釈の妥当性を常に意識しながら場を捉えることが求められていると言える。

このような認識のズレは、子どもと保育者の関係だけに限らず、保育に関与する者の間でも見られる。この保育に関与する者の認識に関しては、役職による認識の差異が検討されている。Peterson 他¹⁷⁾は、4カ国（エストニア、フィンランド、スウェーデン、ハンガリー）の保育者と園長が、保育実践で何に価値をおくのかについて、選出した7項目をもとにそれぞれ順位づけを実施、検討した。結果、フィンランドでは保育者と園長の価値付けが全ての項目において評価が同一であったが、他の3カ国では保育者と園長の価値付けの評定順位に違いが見られた。例えば、人同士や人同ものの“相互作用”の項目では園長よりも保育者の方が価値を高く置く傾向にあるが、“専門性の発達”の項目では保育者よりも園長の方が価値を高く置く傾向にあることが示された。このような価値付けの相違は、環境設定のあり方にも影響することが想定される。この研究は、保育者間の認識のズレを顕在化させており、この認識のズレは場を設える際にも生じることが想定され得るために、それぞれの役職が捉える認識のズレを理解することが重要であると考えられる。

これらの先行研究から、子どもの経験や場への意味づけを問う際、当事者である子どもの経験を読み解き、園環境に反映させるには、多様な観点から捉えることが重要であるとともに、丁寧な配慮が必要であることが示されている。その中でも[子ども－保育者][保育に関与する者同士]それぞれの認識にはズレがあり、それゆえ構造とプロセスの双方向な関係の中で捉えるにはそのズレを認識することが必要であることが確認できる。それらに対しては、子どもの経験であるプロセスから構造を捉えるという流れの中で構造とプロセスの双方向な関係を捉えることが有用であると考えられる。しかし、[保育に関与する者同士]つまり役職別の認識の違いは、子どもの見取りや価値付けの検討にとどまっており、子どもの経験や意味づけと具体的な園庭環境とをいかに結びつけて捉えているのかといった検討はなされていない。子どもの経験と屋外環境との関係の見取り方や、子どもたちに伝わる園固有の使い方と場への意味づけに対する捉え方の違いは、保育を担う立場によっても異なることが想定される。

以上より本研究では、構造とプロセスの双方向な関係の中での保育に関与する者の認識のズレを解明するために、保育に関与する者がそれぞれ子どもの経験や意味づけと屋外環境とをどのように結び付け捉えているのかについて、以下の二点を検討する。1) 保育に関与する者間の認識の違い、つまり保育に関与する者の役職によって、子どもの経験を想起する場の特徴と園庭環境の関連には違いがあるのかを検討する。具体的には、子どもの経験を想起する場の特徴が園庭にいくつあるのかといった回答数の量的検討と、具体的な園庭環境とその場の特徴との関連の質的検討を行う。2) 1) を踏まえて、子どもの経験を想起する場の特徴と園庭環境の物理的要素との関

連を役職別の視点から検討する。以上の二点の検討は、保育に関与する者の役職別の視点から子どもの経験や場の見取りと園庭環境との関係性を知ることや、子どもの経験から構造上の問題を検討することのための一つの視座を提供すると考える。

2. 方法

園庭の実態を問う質問紙調査を保育に関与する園長、副園長、教頭、主任、担任保育者、事務員、およびその他の者に対して実施した^{注2)}。質問紙は執筆者が共同で作成した後、予備調査を実施して複数の園や研究者の意見を聴取した。そこで得た指摘や意見を質問紙に反映し再構成をした上で、配布・回収をした。

【研究協力園及び本研究の対象】 公・私・幼・保などの設置主体や類型を問わず全国の保育・幼児教育施設 3,495 園に質問紙を送付し、1,743 園（回収率 49.8%、うち東京五区 292 園）の回答を得た。本調査では質問紙のうち「子どもの活動」について尋ねた項目を検討する。ここでは、園長 922 名、実践者 445 名、事務員 111 名から回答を得た^{注3)}。また、本質問紙では園庭の物理的環境に関して園庭面積を尋ねる項目を設けた。結果、15㎡に満たない狭小な園庭から 10000㎡を超える広大な園庭など、多様な園庭環境を持つ園から回答を得た。なお、本研究の目的は施設形態による差を知ることではなく、園庭の大小、設備や植栽の有無の違いといった多様な園環境が存在する中で、子どもが場と関わる経験や、意味付ける場の特徴と園庭環境との関係を明らかにすることにある。その中で、それぞれの保育の役職者は、いかに子どもの経験を想起する場の特徴と園庭環境とを結び付けて捉えているのかを分析・検討することに主眼を置くため、対象施設や対象者を限定せずに扱う。

【期間】 2016 年 10 月～12 月に質問紙調査を実施した。

【倫理的配慮】 質問紙の送付時に書面にて目的や倫理的配慮を説明し、同意を得た。なお本調査は、執筆者が所属する大学の倫理専門委員会による倫理審査を経て実施した。研究倫理綱領に則り、研究協力園が特定される情報の漏洩防止とプライバシー保護を徹底し、分析を行った。

【対象項目の内容】 本研究で検討する「子どもの活動について」の項目は、子どもが好きな遊び場の特徴をベースに、保育に関与する者が、子どもの経験を想起する場の特徴と園庭環境とをいかに関連させて捉えているのかを回答してもらう内容である^{注4)} (Fig.1 参照)。今回この質問紙の該当箇所に着目した理由は、保育に関与するそれぞれの役職者が園庭環境と子どもの経験を想起する場の特徴、つまり構造とプロセスの双方向な関係の中で園庭環境をどのように捉えているのかを検討することができる点にある。また、子どもの経験を想起する場の特徴から園庭環境を回答する際、自由選択式（複数回答可）にて回答を得た。自由選択にしたのは、回答者が提示された回答文に誘導されることなく、自園での子どもの経験を想起する場の特徴を思い返しながらか園庭環境を選択する必要があるために、子どもの経験や場の見取りと園庭環境と

の関係の実態に迫ることができるからである。

【方法】 園庭のある 1,659 園について、二点の分析・検討を役職別の視点で行う。第一に、子どもの経験を想起する場の特徴が園庭にいくつあるのかといった園庭環境の数と場の特徴との関係、及び具体的な園庭環境と場の特徴との関連を検討する。具体的には、園長・実践者・事務員の三役職に着目して、保育に関与する者それぞれの役職者別の見取りを量的・質的に探る。第二に、子どもの経験を想起する場の特徴を園庭環境の要素に着目して検討する。園庭環境における場の性質については、石田他⁹⁾ が園庭の物理的環境について示された幼稚園施設整備指針⁵⁾ の「第 4 章 園庭計画」をもとに分類し、園庭環境を振り返ることを目的として作成した「園庭環境多様性指標」の分類を参考にした。これは、幼児の心身の発達と場の機能とを考慮して分類がなされており、必要な園庭環境を要素の視点から捉え直す際に有用であると考えたためである。なお、今回事務員を対象に加えたのは、子どもが過ごす施設環境の整備や対物的支援など、乳幼児施設の安全管理を担う存在であり、乳幼児が過ごす施設の環境を整え、安心・安全を保つことを通して、乳幼児の成長や発達を間接的に支える存在として、重要な役割を担っていると判断したためである。

Part.2 子どもの活動について(園庭がある場合のみご回答ください)

Part2. 園庭における子どもの活動についてご回答ください

1. 園庭の遊び場について、以下の機能が含まれる場がありますか。ある場合は、具体的な場所について、選択肢1.~29.から選び(複数選択可)、番号をご記入ください。ない場合は「30」とご記入ください。

【機能】

1. 子どもたちが隠れて遊べる場	6. 子どもたちのきまりやルールが生じる場
2. 一息つくことができる場	7. 子ども(たち)が自分(たち)の目標に向かって挑戦をすることができる場
3. 繰り返し同じような遊びができる場	8. 友だちと待ち合わせをしたり、自然と集まったりする場
4. 色々な発想を形にできる場	9. 想像を膨らませることのできる場
5. 他の子どもの遊びを見ることができる場	10. 五感を働かせる(五感を意識できる)場

【選択肢】

1. 園庭全体	2. 開けたスペース	3. 雑草地や芝生地	4. 築山や斜面	5. 遊び小屋
6. 樹木	7. 生垣	8. トンネル	9. 砂壇	10. 土の場所
11. 水道や井戸	12. 水路や池	13. プール	14. 花壇	15. 菜園
16. 飼育スペース	17. 複合型遊具	18. 鉄棒	19. ジャングジム	20. ブランコ
21. 滑り台	22. 登り棒	23. うんてい	24. シーソー	25. 縁側・デッキ・テラス
26. 東屋	27. ベンチ	28. 屋外用机	29. その他	30. 該当なし

Fig.1 本調査に使用する質問紙調査該当箇所

3. 結果と考察

各園の役職別回答者（園長・実践者・事務員）と、子どもの経験を想起する園庭環境 (Fig.1 参照) の数に着目し、データを抽出し分析・検討を行った。次に、園長・実践者・事務員それぞれの役職において、回答された具体的な園庭環境の上位五項目を抽出し、分析・検討を行った (Table.1, 2, 3)。

3 (1) 回答者の役職と回答された平均園庭環境数との関係

第一に、保育に関与する者の役職によって、子どもの経験を想起する場の特徴と園庭環境の関連には違いがあるのかを検討するために、三役職それぞれが子どもの経験を想起する場の特徴を持つ園庭環境の平均回答数を分析した。結果、役職により言及する園庭環境の回答数には違いが見られた (Table.1 参照)。特に、実践者の園庭環

境の回答数は他の役職よりも0.18～0.73高く、全体を通して回答数が多いことが確認されものの、役職ごとの回答数自体の差は大きなものではなかった。また三群における1要因の分散分析を行ったところ、有意差はなかった。この結果から、子どもと実際に触れ合うことが多いとされる役職（実践者）では、他の役職と比較すると子どもの経験と園庭環境を結びつける傾向にはある。そして、子どもとの日頃の距離感が回答数に影響を与える可能性がある。しかし、三役職での回答数自体に大きな差が見られない点に関しては、情報共有などの意思疎通が様々な役職間でなされている可能性が考えられる。

三役職において、平均回答数が相対的に少ない項目として「1 子どもたちが隠れて遊べる場（園長：2.34、実践者：2.63、事務員：2.45）」が挙げられる。この結果は危険回避のために大人の目が行き届かない園庭環境を極力少なくする¹⁸⁾といった心理が場の設定や場の見取りに影響を与えている可能性がある。また、「2 一息つくことができる場（園長：2.81、実践者：3.29、事務員：3.03）」や「4 色々な発想を形にできる場（園長：3.05、実践者：3.78、事務員：2.98）」もまた全体的に回答数が少ない。逆に、回答数が多い項目として「3 繰り返し同じような遊びができる場（園長：5.50、実践者：6.55、事務員：6.03）」が挙げられる。この乳幼児期に重視される繰り返しの大切さへの視点¹⁸⁾は、役職によらず、園長・実践者・事務員間で共通して意識していることが考えられる。また、「6 子どもなりのきまりやルールが生じる場（園長：4.85、実践者：5.64、事務員：5.18）」の回答数も全体的に多い。園庭環境と子どもの遊びとを結びつける際に、園長・実践者・事務員それぞれの役職で規範意識の観点をより意識していることが示された。

三役職それぞれに、子どもの経験を想起する場の特徴がある園庭環境の数についての散らばりの大小は異なるが、園長の散らばりは0.08～0.35と他の役職よりも散らばりが小さいことが示された。三役職ともに散らばりが大きい項目として「10 五感を働かせる場（園長平均：4.45、SD：0.21、実践者平均：5.16、SD：0.56、事務員平均：4.51、SD：1.01）」が挙げられる。つまり、各役職が「五感を働かせる場」を想起する園庭環境の数は、園間の環境の違いが大きいことが考えられる。今回の調査では、施設形態や園庭環境を限定しておらず、結果としても様々な環境を持つ園の回答を得ている。この項目は、子どもの五感が動くと言われる場を問うているため、想定される場面や環境の多様さとともに、施設形態や園庭環境の相違が関係する可能性があり、それはより実践に近い役職で影響した可能性も示唆される。一方で、三役職ともに散らばりが小さい項目として「2 一息つくことができる場（園長平均：2.81、SD：0.08、実践者平均：3.29、SD：0.18、事務員平均：3.03、SD：0.20）」が挙げられる。この項目は、園庭環境の平均回答数も三役職で少なかった。このように、静的活動を意味する休息の場や感覚や創造を生み出す場は、保育に関与する者が意識しづらいものであり、それゆえ、これらの場を保障することの難しさがあると推察される。

以上、三役職別での平均園庭環境回答数に関して、回答数の大小や回答数の役職別の散らばりに着目して検討した。ここでは、子どもの経験を想起する場の特徴である10個の特徴から検討することで、子どもの経験を想起する場の特徴に対する園庭環境の役職別の視点が示された。次に、それぞれの特徴が見られる場として、具体的にどのような園庭環境が挙げられたのかを役職別に見ていく。

Table.1 子どもの経験を想起する場の特徴に対する園庭環境の役職別平均回答数および散らばり

子どもの活動から捉える場の機能	園長*		実践者*		事務員*	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
1 子どもたちが隠れて遊べる場	2.34	0.35	2.63	0.26	2.45	0.29
2 一息つくことができる場	2.81	0.08	3.29	0.18	3.03	0.20
3 繰り返し同じような遊びができる場	5.50	0.17	6.55	0.42	6.03	0.44
4 色々な発想を形にできる場	3.05	0.09	3.78	0.50	2.98	0.25
5 他の子どもの遊びを見ることができる場	4.46	0.15	5.09	0.06	4.36	0.37
6 子どもなりのきまりやルールが生じる場	4.85	0.08	5.64	0.40	5.18	0.45
7 自分の目標に向かって挑戦することができる場	3.88	0.23	4.60	0.30	3.80	0.24
8 待ち合わせをしたり、自然と集まれる場	3.50	0.08	4.27	0.27	3.77	0.24
9 想像をふくらませることのできる場	3.43	0.11	4.16	0.50	3.60	0.39
10 五感を働かせる(五感を意識できる)場	4.45	0.21	5.16	0.56	4.51	1.01

* 園長(園長、理事長)、実践者(副園長、主任担任、教頭)、事務員(事務員、その他)

* 実線太(細)枠は平均回答数が多い(少ない)項目、点線太(細)枠は分散が大きい(小さい)項目

3 (2) 回答者の役職と回答上位五項目の園庭環境との関係

第二に、子どもの経験を想起する場の特徴と園庭環境との関連を検討するために、子どもの経験を想起する場の特徴がある園庭環境として三役職それぞれが回答した上位五項目の具体的な園庭環境を抽出した。結果、三役職が回答した上位五項目は順位の変動が見られるものの、比較的類似する傾向が示された(Table.2 参照)。第一に、三役職が共通して挙げた場の特徴を見ると、「3 繰り返し同じような遊びができる場」「8 友だちと待ち合わせをしたり、自然と集まったりする場」「10 五感を働かせる場」が挙げられる。第二に、上位五項目中1項目のみ違いがみられた特徴には、「1 子どもたちが隠れて遊べる場(園長のズレ1項目)」「4 色々な発想を形にできる場(園長のズレ1項目、事務員のズレ1項目)」「5 他の子どもの遊びを見ることができる場(園長のズレ1項目、事務員のズレ1項目)」「6 子どもなりのきまりやルールが生じる場(事務員のズレ1項目)」「7 子どもが自分の目標に向かって挑戦をすることができる場(事務員のズレ1項目)」「9 想像を膨らませることのできる場(園長のズレ1項目、実践者のズレ1項目、事務員のズレ1項目)」が挙げられる(Table.2 太枠参照、以下同様)。第三に、上位五項目中2項目のみ違いがみられた場の特徴には、「2 一息つくことができる場(事務員のズレ2項目)」が挙げられる。このように、それぞれの場の特徴に対する具体的な園庭環境の回答は、園長・実践者・事務員といったそれぞれの役職で類似性があることが確認できる。つまり、子どもの経験を想起する場の特徴と園庭環境との関連は、役職間にズレが少ないことが示された。

保育に関与する者には、それぞれ3(1)の場の回答数で類似傾向が示されたのと同様に、回答される具体的な園庭環境についても類似傾向が示された。これは、保育の役職において、実際に子どもと関わることや子どもの経験を自分の目で確認することの有無に関わらず、保育に関与す

Table.2 場が持つ特徴において、各園の役職者がそれぞれ想起する園庭環境の平均回答数上位五項目と割合

1. 子どもたちが隠れて遊べる場									
園長 (n=922)			実践者 (n=445)			事務員 (n=111)			
1位	複合型遊具	298	32.3%	複合型遊具	196	44.0%	複合型遊具	52	46.8%
2位	遊び小屋	295	32.0%	遊び小屋	181	40.7%	遊び小屋	46	41.4%
3位	樹木	265	28.7%	樹木	132	29.7%	樹木	37	33.3%
4位	トンネル	220	23.9%	トンネル	127	28.5%	トンネル	36	32.4%
5位	築山・斜面	172	18.7%	園庭全体	97	21.8%	園庭全体	19	17.1%
3. 繰り返し同じような遊びができる場									
園長			実践者			事務員			
1位	砂場	622	67.5%	砂場	318	71.5%	砂場	71	64.0%
2位	園庭全体	421	45.7%	複合型遊具	223	50.1%	複合型遊具	60	54.1%
3位	滑り台	390	42.3%	滑り台	219	49.2%	滑り台	60	54.1%
4位	複合型遊具	349	37.9%	園庭全体	217	48.8%	鉄棒	58	52.3%
5位	鉄棒	342	37.1%	鉄棒	203	45.6%	園庭全体	48	43.2%
5. 他の子どもの遊びを見ることが出来る場									
園長			実践者			事務員			
1位	園庭全体	556	60.3%	園庭全体	318	71.5%	園庭全体	72	64.9%
2位	砂場	385	41.8%	砂場	203	45.6%	砂場	40	36.0%
3位	複合型遊具	237	25.7%	緑側・デッキ・テラス	161	36.2%	複合型遊具	37	33.3%
4位	開けたスペース	218	23.6%	開けたスペース	144	32.4%	開けたスペース	32	28.8%
5位	築山・斜面	199	21.6%	複合型遊具	144	32.4%	鉄棒、緑側・デッキ・テラス	28	25.2%
7. 子どもが自分の目標に向かって挑戦をすることができる場									
園長			実践者			事務員			
1位	鉄棒	521	56.5%	鉄棒	286	64.3%	鉄棒	65	58.6%
2位	園庭全体	337	36.6%	うんてい	196	44.0%	うんてい	45	40.5%
3位	うんてい	336	36.4%	登り棒	189	42.5%	園庭全体	35	31.5%
4位	登り棒	327	35.5%	園庭全体	184	41.3%	複合型遊具	33	29.7%
5位	砂場	250	27.1%	砂場	153	34.4%	砂場	28	25.2%
9. 想像を膨らませることができる場									
園長			実践者			事務員			
1位	砂場	642	69.6%	砂場	321	72.1%	砂場	70	63.1%
2位	園庭全体	315	34.2%	園庭全体	195	43.8%	園庭全体	48	43.2%
3位	土の場所	248	26.9%	土の場所	123	27.6%	複合型遊具	29	26.1%
4位	遊び小屋	169	18.3%	遊び小屋	121	27.2%	遊び小屋	25	22.5%
5位	雑草・芝生地	166	18.0%	築山・斜面	104	23.4%	土の場所	24	21.6%

※項目について「無印」は3役職が共通して回答された場合、「点線のみ」は2役職のみ回答された場合を、

2. 一息つくことができる場									
園長			実践者			事務員			
1位	緑側・デッキ・テラス	491	53.3%	緑側・デッキ・テラス	285	64.0%	緑側・デッキ・テラス	59	53.2%
2位	ベンチ	408	44.3%	ベンチ	235	52.8%	ベンチ	57	51.4%
3位	遊び小屋	201	21.8%	遊び小屋	130	29.2%	遊び小屋	29	26.1%
4位	砂場	146	15.8%	砂場	81	18.2%	雑草・芝生地	15	13.5%
5位	屋外用机	137	14.9%	屋外用机	73	16.4%	複合型遊具	15	13.5%
4. いろいろな発想を形にできる場									
園長			実践者			事務員			
1位	砂場	681	73.9%	砂場	354	79.6%	砂場	80	72.1%
2位	土の場所	292	31.7%	園庭全体	174	39.1%	園庭全体	37	33.3%
3位	園庭全体	285	30.9%	土の場所	155	34.8%	土の場所	32	28.8%
4位	雑草・芝生地	146	15.8%	開けたスペース	108	24.3%	開けたスペース	21	18.9%
5位	築山・斜面	144	15.6%	築山・斜面	91	20.4%	遊び小屋	18	16.2%
6. 子どもなりのきまりやルールが生じる場									
園長			実践者			事務員			
1位	砂場	441	47.8%	砂場	230	51.7%	複合型遊具	57	51.4%
2位	園庭全体	422	45.8%	園庭全体	225	50.6%	砂場	51	45.9%
3位	滑り台	358	38.8%	滑り台	211	47.4%	滑り台	51	45.9%
4位	複合型遊具	341	37.0%	複合型遊具	193	43.4%	園庭全体	47	42.3%
5位	ブランコ	306	33.2%	ブランコ	170	38.2%	鉄棒	42	37.8%
8. 友だちと待ち合わせをしたり、自然と集まったりする場									
園長			実践者			事務員			
1位	砂場	402	43.6%	砂場	228	51.2%	砂場	50	45.0%
2位	園庭全体	298	32.3%	園庭全体	159	35.7%	園庭全体	41	36.9%
3位	緑側・デッキ・テラス	236	25.6%	緑側・デッキ・テラス	145	32.6%	複合型遊具	39	35.1%
4位	複合型遊具	231	25.1%	複合型遊具	142	31.9%	緑側・デッキ・テラス	29	26.1%
5位	遊び小屋	178	19.3%	遊び小屋	114	25.6%	遊び小屋	27	24.3%
10. 五感を働かせる(五感を意識できる)場									
園長			実践者			事務員			
1位	砂場	516	56.0%	砂場	269	60.4%	園庭全体	56	50.5%
2位	園庭全体	377	40.9%	園庭全体	223	50.1%	砂場	54	48.6%
3位	菜園	341	37.0%	花壇	177	39.8%	菜園	38	34.2%
4位	花壇	308	33.4%	菜園	169	38.0%	花壇	36	32.4%
5位	樹木	298	32.3%	樹木	168	37.8%	樹木	29	26.1%

「太枠のみ」は1役職のみ回答された場合を、それぞれ意味している。

る者の間には、通底する子どもの経験を見る視点がある可能性が推察できる。そして、全国の園環境は多様であるものの、子どもの経験を想起する場の特徴と園庭環境との関連は、全国の園の中でも類似することが考えられる。

3 (2)-1 園庭環境多様性指標に基づく場の分類と役職別回答上位五項目の検討

次に、豊かな経験を保障するための場の構造的な特徴との関連を明らかにするために、子どもの経験を想起する場の特徴を園庭環境の物理的要素に着目して役職別に検討する。その際、園庭環境多様性指標⁹⁾をもとに、本質問紙の項目に該当する場をFig.2にあるA)～F)の五要素(15項目)に当てはめ、三役職の回答上位五項目との関係を検討する(Fig.2参照)。ただし、C)自由に発想し工夫ができる環境とF)保護者や地域の方と交流ができる環境は質問紙の選択肢に該当がないため、分析の対象から除外した。

結果、上位五項目はTable.3のように分類された注5)。以下、上記五箇所の“場の分類”を中心に、“10の場の特徴”と“三役職”との関係を検討する。

3 (2)-2 「A. 自然とふれあい楽しむことができる環境」と子どもの経験を想起する場の特徴での役職別回答の検討

「土や砂、水、植物、飼育物」の物理的特徴を持つ要素Aと回答者が挙げた子どもの経験を想起する場の特徴の関係は、Table.2, 3の通り「4 いろいろな発想を形にできる場」「9 想像を膨らませることのできる場」「10 五感を働かせる(五感を意識できる)場」と関連しやすいことが示された。つまり、自然と触れ合い楽しむことができる

A. 自然とふれあい楽しむことができる環境	a. 土や砂遊び場	C. 自由に発想し工夫ができる環境	i. 道具や素材
b. 水遊び場	D. 休憩や穏やかな活動ができる環境	k. 休憩や穏やかな活動の場所	
c. 菜園や花壇	d. 芝生地や雑草地	E. 園庭全体の活動を支えるための環境	l. 日陰
e. 樹木やつる性植物	f. 飼育物	m. 園庭と園舎のつながり	
B. 身体を使って楽しむことができる環境	g. 築山や斜面	n. 全体的な配置	
h. 道具	F. 保護者や地域の方と交流ができる環境	o. 保護者や地域の方との交流の場所	
i. 開けたスペース			

Fig. 2 園庭環境多様性指標(2018)に基づく園庭環境の分類

Table.3 園庭環境多様性指標の分類に基づく、回答上位五項目に関する役職別“場の分類”の回答数

子どもの経験を想起する場の特徴	1		2		3		4		5	
多様性指標における園庭環境の要素	園	保	事	園	保	事	園	保	事	園
A. 自然とふれあい楽しむことができる環境	1	1	1	1	1	1	1	1	3	2
B. 身体を使って楽しむことができる環境	2	1	1	0	0	1	3	3	3	1
C. 自由に発想し工夫ができる環境	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D. 休憩や穏やかな活動ができる環境	2	2	3	3	2	0	0	0	0	1
E. 園庭全体の活動を支えるための環境	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
子どもの経験を想起する場の特徴	6		7		8		9		10	
多様性指標における園庭環境の要素	園	保	事	園	保	事	園	保	事	園
A. 自然とふれあい楽しむことができる環境	1	1	1	1	1	1	1	1	3	2
B. 身体を使って楽しむことができる環境	3	3	3	3	3	1	1	1	0	1
C. 自由に発想し工夫ができる環境	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D. 休憩や穏やかな活動ができる環境	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0
E. 園庭全体の活動を支えるための環境	1	1	1	1	1	2	2	2	1	1

園…園長、保…保育者、事…事務員

環境は、三役職にとって創造性、想像性、感性といった場の特徴と結びつけて捉える傾向にあることが示された。園庭環境多様性指標では、創造性の内容が要素Cに分類されているが、要素Aにおいても創造性の要素を含み得ることが回答から示唆された。三役職の回答では「砂場」が共通して挙げられており、三役職において、この自然との触れ合いを楽しむ環境と「砂場」との親和性が高いことが推察される。また、要素Aで「芝生」は園長のみ回答された視点として示された。

3 (2)-3「B. 身体を使って楽しむことができる環境」と子どもの経験を想起する場の特徴での役職別回答の検討

「遊具、築山、トンネル」など空間に変化が生じる物理的特徴を持つ要素Bと回答者が挙げた子どもの経験を想起する場の特徴の関係は、Table.2, 3の通り「3 繰り返し同じような遊びができる場」「5 他の子どもの遊びを見ることができる場」「6 子どもなりのきまりやルールが生じる場」「7 子どもが自分の目標に向かって挑戦をすることができる場」と関連しやすいことが示された。つまり、身体を使って楽しむことができる環境は、三役職にとって継続性、観察を通した内面に生じる相互作用、規範、挑戦といった場の特徴と結びつけて捉える傾向にあることが示された。三役職の回答では「複合型遊具」が全項目において挙げられており、身体を使って楽しむことができる環境と「複合型遊具」は認識が結びつきやすいことが推察される。また、要素Bで「築山・斜面」は園長のみに回答された視点として示された。

3 (2)-4「D. 休憩や穏やかな活動ができる環境」と子どもの経験を想起する場の特徴での役職別回答の検討

「ベンチや東屋」など休憩という物理的特徴を持つ要素Dと回答者が挙げた子どもの経験を想起する場の特徴の関係は、Table.2, 3の通り「1 子どもたちが隠れて遊ぶ場」「2 一息つくことができる場」と関連しやすいことが示された。つまり、休憩や穏やかな活動ができる環境は、三役職にとって静の活動と共に、自分だけの空間を確保できることと結びつけて捉える傾向にあることが示された。三役職の回答では「遊び小屋」が共通して挙げられており、三役職において、この休憩や穏やかな活動ができる環境と「遊び小屋」は認識が結びつきやすいことが推察される。また要素Cでは、役職間の回答に違いがみられなかった。

3 (2)-5「E. 園庭全体の活動を支えるための環境」と子どもの経験を想起する場の特徴での役職別回答の検討

「木陰、ウッドデッキ」などクールダウンや屋内外の接続といった活動の切り替えといった物理的特徴を持つ要素Eと回答者が挙げた子どもの経験を想起する場の特徴の関係は、Table.2, 3の通り「5 他の子どもの遊びを見ることができる場」「8 友だちと待ち合わせをしたり、自然と集まったりする場」と関連しやすいことが示された。つまり、園庭全体の活動を支えるための環境は、三役職にとって観察、出会いといった他者との接続の場と結びつけて捉える傾向にあることが示された。三役職の回答では「園庭全体」「縁側・デッキ・テラス」が挙げられており、三役職において、園庭全体の活動を支えるための環境と「園庭全体」「縁側・デッキ・テラス」は認識が結びつきやすいことが推察される。ただし、要素Eでは「縁側・デッキ・テラス」の回答を園長のみしていないことがあり、視点のズレが示された。

以上、子どもの経験を想起する場の特徴を園庭環境の要素に着目して役職別に検討をした結果、保育に関与する者は多くの場で共通する視点を持つこと、また各要素

と具体的な園庭環境とは関係性があることが示された。さらに、場の要素から役職別に検討をすると、園長の回答のズレが生じやすいことが確認できた。また、事務員は保育者と類似した視点を持ち得ることが示された。

4. 総合考察および今後の課題

本研究では、屋外環境である園庭について、保育に関与する者、特に三役職である園長・実践者・事務員は、子どもの経験や場の見取りの観点からいかに具体的な園庭環境を捉えるのか、といったそれぞれの役職における場の捉え方の違いを検討してきた。特に、子どもの経験を想起する場の特徴がある園庭環境を分析・考察することで、本研究ではプロセスの視点から構造の視点を捉え直す形で双方向な関係を検討してきた。

結果、第一に、役職別の園庭環境の回答数に関して、それぞれの役職ごとに回答数には若干の違いはあるが、園庭環境の回答数はほぼ類似することが示された。特に、三役職において、継続性や規範といった要素に結びつく場数は多く、休憩や創造性といった要素に結びつく場数は少ないことが示された。役職間において、子どもの経験を想起する場の特徴がある園庭環境の場所数には、共通性があることが推察される。また、役職別の子どもの経験を想起する場の特徴がある園庭環境の回答数は、「五感を働かせる場」の散らばりが大きいことが示された。施設形態や園庭環境が影響し得る要素であることが推察される。一方、「一息つくことができる場」は散らばりが小さく、認識のズレが少ない項目であることが確認された。

第二に、役職別上位五項目に関しては、三役職において子どもの経験を想起する場の特徴と園庭環境には、役職間にズレが少ないことが示された。保育に関与する者の間には通底する子どもの経験を見る視点がある可能性が推察できる。一方で、園庭環境多様性指標を用いて場の要素から捉えると、子どもの経験を想起する場の特徴と場の要素はそれぞれの項目によって認識の結びつきやすさに違いがあり、子どもの経験を想起する場の特徴と園庭環境の物理的要素とのつながりが示された。これらの点について、例えば園庭の無い園や園庭の小さな園に環境を設える際に、今回明らかになった子どもの経験や場の機能の見取りと園庭環境といった役職別の視点は、その物理的な環境の制約を超えて、何を設置すれば子どもの経験をより豊かにする可能性があるのかを検討する際に一定の視座を提供することができる。特に、園庭環境多様性指標の観点から三役職の場の捉えを見ると、園長の視点には他の二役職とのズレが確認された。園庭環境のうち、特に場の要素から検討をする際には、保育に関わる者同士の認識のズレは生じ得るからこそ、場の検討を複数で行う際は配慮が必要である。

以上、多様な園環境の中でも役職共通にある子どもの経験を見取る視点は、環境設定・配置を検討する一つの方向性を提示し得ることが本研究で示された。それは、プロセスの視点から構造の視点を捉え直すことや三役職

の認識に迫ることで見出せたと言える。その中でも、保育に関与する者は、子どもの経験を想起し場を捉える視点を多様に有しており、その共通性が示される一方で、場の物理的要素との関係においては園長の視点と他の二役職の視点とのズレもまたあることが明らかになった。これらの観点については、Dahlberg 他¹⁹⁾が環境を一義的な視点からではなく、各園が持つ保育の価値観や評価基準と、子どもとのかかわりから得る固有の文脈とを織り交ぜながら、多元的に環境を見ていく中で、環境の質を高めていくことが重要であるという指摘と関連する。この指摘は園庭に関しても同様であり、特に本研究を踏まえて、プロセスから構造を見るという形で検討することの可能性と共に、園庭の質向上への展望の一端を示すことができた。

これらの観点を踏まえて、今後の課題を以下に記す。

第一に、より多様な役職者から子どもの経験や場の見取りと具体的な園庭環境との関係を明らかにする必要がある。今回行った質問紙調査から、全国の施設形態を超えて役職それぞれに共通の視点を持ち得ることが示された。しかし、質問紙の性質上、その意味づけの具体的な根拠にまで踏み込むことができなかった。保育に関与する者がそれぞれ子どもの経験や場の機能の見取りと園庭環境とを結びつけた理由は、それぞれに固有の見方や捉え方などがなされているはずである。物理的環境である構造と子どもの経験にあるプロセスの双方向な関係のあり方をより豊かにしていくには、各園が持つ価値観や文化を背景にした実践において見られる視点に迫る必要があり、よりミクロな視点でそれぞれの園の一人一人の知恵を明らかにする必要がある。よって今後は、本研究で扱った質問紙「子どもの活動について」の内容に関して、園を単位での役職間の比較や、園単位での園長、保育者、事務員で共有する内容や機会が多い園と少ない園で何が違うかといった、より小さな規模での多様な役職の捉えの検討を蓄積していく必要がある。

第二に、子どもにとっての屋外環境を考える際に、園庭環境が無い園を考慮する必要がある。今回子どもの経験や場の機能の見取りと園庭の具体的な場との関係を検討してきたが、これが地域環境においても同様であるのかは検討を要する。特に、園庭を持たない園は身近な公園などの地域環境を活用している。地域環境は保育に関与する者が手を加えることは困難である。だからこそ、子どもが既存の環境でどのように経験し、場の機能を意味付けているのか、そして保育に関与する者はその既存の場をどのように捉えているのかを検討することは、今増加傾向にあるこれらの園に寄与するものとなる。この地域環境を“拡張された園庭”としてそれぞれの園で意味付け直されることが今後の子どもの育ちや環境を保障することにもなり、構造とプロセスの双方向な関係を地域環境でも捉えることにつながると考える。

注：

注1) OECDはStarting Strong II²⁰⁾で構造の質は、広さ、人数比、

クラス規模や労働環境といった物的・人的環境の全体的な構造を示しており、法令などで規制され得る質として定義されている。プロセスの質は、安心感や教育的意図などを含みこむ関係性、つまり[保育者—子ども][子ども同士][保育者同士]といった全体的な関わりを示しており、子どもの日々の経験についての質として定義されている。

注2) 本調査では「園長、副園長、教頭、主任、担任保育者、事務員、その他」の7項目を設け、回答者の役職を選択してもらった。回答者は「一人でも複数人でご回答いただいても結構です」として、特定の人に回答を依頼することはせず、多様な回答者を想定した。回答された役職は、“園全体の責任を担い統括する役職”、“園児により近い立場で園の責任を分有する役職”、“環境や事務といった間接的視点から園児に関わる役職”の三群に分類した。具体的には、「園長（園長、理事長）」、「実践者（副園長、教頭、主任、教諭）」、「事務員（事務員、その他）」の三群に分類した。実践者に副園長を入れたのは、園長業務のサポートをするが、職員、園環境、保護者、子どもといったより保育者に近い立場で関係を繋いでいく職種として位置づけた今井²¹⁾の視点を本論文では採用したためである。また、教頭は“就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律”²²⁾第14条6に則り、「園長（及び副園長）を助け、園務を整理し、並びに必要に応じ園児の教育及び保育をつかさどる」という文言からより実践に近い役職と解釈した。

注3) 本調査では、園長、実践者、事務員といった回答者別で群分けを行ったため、質問紙に一園につき回答者が複数いる場合は、分析ではその回答を除外した。

注4) 項目作成に際しては、子ども自身が園環境にどのような経験をし意味づけをしているのかについて、写真投影法とインタビューを行い、園環境の質的検討をする中で子どもの視点から子どもの経験に迫った宮本他²³⁾の知見をもとにした。具体的には、この知見である3つの場の要素と8つの場の特徴のうち、“常にある場”といった場の要素は今回の調査では大部分に該当することからこの項目を除外しており、残りの10項目から構成をしている。

注5) 分類に際しては、筆頭著者が独立に分類し、共同著者との協議の上で決定した。

付記・謝辞

本研究は、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センターSEED研究助成支援を受け、2016年度に調査をした内容の一部を分析し、2018年度こども環境学会にてポスター発表をした内容をさらに分析したものです。本研究にご協力いただいた園の皆様には感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 文部科学省：幼稚園教育要領、フレーベル館、2017.5
- 2) 仙田満：子どもとあそび・環境建築家の眼へ、岩波新書、1992.11
- 3) Bhosale, J., Duncan, S. & Schofield, G. : Intergenerational change in children's independent mobility and active transport in New Zealand children and parents, Journal of Transport & Health, 7, pp. 247-255, 2017.12
- 4) 秋田喜代美、辻谷真知子、石田佳織、宮田まり子、宮本雄太：園庭環境の調査検討 - 園庭研究の動向と園庭環境研究の多様性の検討 -, 東京大学大学院教育学研究科紀要 57 巻, pp. 43-65, 2018.3
- 5) 文部科学省：幼稚園施設整備指針、2018.3
- 6) Clark, A. : Transforming Children's Spaces : Children's and

- Adults' Participation in Designing Learning Environments, Routledge, 2010.2.
- 7) 高山静子：環境構成の理論と実践、エイデル研究所、2014.5
 - 8) OECD：Engaging Young Children：Lessons from Research about Quality in Early Childhood Education and Care, 2018.3
 - 9) 秋田喜代美、辻谷真知子、石田佳織、宮田まり子、宮本雄太：子どもの経験をより豊かに - 園庭の質向上のためのひと工夫へのいざない、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（Cedep）園庭調査研究グループ、2018.1
 - 10) 河邊貴子：園庭の環境の再構築による幼児の遊びの新しい展開 - ウッドデッキの新設をめぐって -、保育学研究第44巻第2号、pp. 139-149、2016. 12
 - 11) Pearce, G. and Bailey, R.：Football Pitches and Barbie Dolls：Young Children's Perceptions of Their School Playground, Early Child Development and Care, 181（10）, pp. 1361-1379, 2011.8
 - 12) Wyver, S.：Guest Editor's Introduction：Special Issue, Outdoor Play and Learning, Asia-Pacific Journal of Research in Early Childhood Education, 12（2）, pp. 1-5, 2018.5
 - 13) 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（Cedep）：「今、日本の保育の真実を探る～九万人の保育者と千七百カ所の自治体関係者の声を聴く～」公開シンポジウム資料、2016.9
 - 14) 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（Cedep）：「人生のはじまりを豊かに～乳幼児の発達・保育研究のイノベーション～」、2017.8
 - 15) Lester, S. and Maudsley, M.：Play, naturally; A review of children's natural play. London：Children's Play Council, 2006.8
 - 16) 宮本雄太、秋田喜代美、杉本貴代、辻谷真知子、宮田まり子：保育者が捉える幼児の遊び場の認識、国際幼児教育研究第24号、pp.59-72、2017. 3
 - 17) Peterson, T., Veisson, M., Hujala, E., Härkönen, U., Sandberg, A., Johansson, L., and Bakosi Eva, K.：Professionalism of preschool teachers in Estonia, Finland, Sweden and Hungary, European Early Childhood Education Research Journal, 24（1）, pp. 136-156, 2016.1
 - 18) 藤田貴久：幼児期にふさわしい園庭環境に対する保育者の意識、兵庫教育大学、2013.3
 - 19) Dahlberg, G., Moss, P., & Pence, A.：Beyond Quality in Early Childhood Education and Care：Language of Evaluation（Routledge Education Classic Edition）, London：Routledge, 2013.3
 - 20) OECD：Starting Strong II：Early Childhood Education and Care, 2006.
 - 21) 今井和子：主任保育士・副園長・リーダーに求められる役割と実践的スキル、ミネルヴァ書房、2016.4
 - 22) 内閣府：就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律、[http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/094/shiryo/attach/1328047.htm]（情報取得：2018.8.12）、2006.
 - 23) 宮本雄太、秋田喜代美、辻谷真知子、宮田まり子：幼児の遊び場の認識：幼児による写真投影法を用いて、乳幼児教育学研究、25巻、pp. 9-21、2016. 12